お嬢様とわたし

ふとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お嬢様とわたし

【Nコード】

N8269K

【作者名】

ふとん

【あらすじ】

彼女はお嬢様。

じゃあ彼は？

お嬢様とわたしの、さみしくて、暖かくて、ちょっと切ないお話。

彼女の口と

僕の朝はコーヒーの香りと共に始まる。

「起きてるの！ 吉之介！」

訂正。

僕の朝はコーヒーの香りと彼女の怒声で始まる。

「おはよう。麗子さん」

ダイニングテーブルには暖かいコーヒーとクロワッサン、ハムエッグの皿が並んでいる。それから、

「オハヨウゴザイマス」

不機嫌を隠そうともせず、それでもエプロンをつけてサラダを運んできたのは、彼女だ。

ドイツ人のクウォーターだというその血筋を表す亜麻色の長い髪、透けるような白い肌、鮮やかなコバルトブルーの瞳。まるで精巧な人形のような華奢な姿だ。ブラウスとジーンズという簡素ないでたちながら、立っているだけで高貴な空気を纏っている。

彼女、高円寺麗子さんは今年大学三年生になる高円寺財閥のお嬢様だ。わけあって、僕と一緒に暮らしている。狭いマンションの部屋で窮屈だろうに、こういう家政婦のようなことをしてくれているのは、僕の生活能力のなさを見かねてのことだ。彼女はお嬢様という出自ながら、家事がとでも得意だった。

「今日もおいしそうな朝ごはんだね」

僕は食卓につきながら、やはり彼女がテーブルに並べてくれた新聞を手に取る。

「いつも同じでしょう。それって嫌味なのかしら？」

硝子細工のような印象を吹き飛ばすような言葉をサラダと一緒に彼女は並べる。

「嫌味じゃないよ」

彼女は毎朝ハムエッグとサラダを作り、クロワッサンを焼いてくれる。焼きたてのパンとコーヒーが独身の会社員にとってどれだけ贅沢なことか。

「とても感謝してますってことだよ。いつも美味しい朝ごはんをありがとう、麗子さん」

「ばっ…！」

彼女は何かを叫びかけて、口をぱくぱくさせたがそれ以上何も言わずに、自分の席へとついた。今日は彼女も朝から講義があるようだ。

「どうしたの？ 顔、赤いよ。熱とか…」

「何でもない！ 早く食べないと遅刻するでしょ…！」

結局、僕より早く朝食を食べ終わった彼女は、慌てて出かけてしまった。車で送るって言ったのに。

大丈夫かな。風邪なんてひいてないと良いけれど。

彼のこと

私が、二十歳になったとき、私の家は借金でクビが回らなくなっていた。

今まで何不自由なく暮らしてきた私たちは、唐突にやってきたこの災難を振り切れることができなかったのだ。

高円寺、といえば財閥のなかでも一目おかれている家柄で、稼ぎ頭ではないがその古式ゆかしい家系から輩出する人物は大方がアツパーに属するのが普通だった。

その高円寺本家が借金という驚くほど庶民的な災難に見舞われることになったのは、一重に私の父のためである。

高円寺家始まって以来の天性の気位の高さと人を見る目がなかった父は家柄目当てに寄つてたかつてきた新興の金の亡者どもにあつたという間に身包みを剥がされてしまったのだ。

あちこちにあつた家や土地を売り払つても到底、積もりに積もつた不良債権は処理しきれるものではなく、とうとう持ち株会社を全て手放すことになった。

ようやく私が事情を知つたのは、どこかの金持ちの後家として売られる算段がまとまつた後だった。

「今日は大変だったわね、麗子さん」

典型的なお嬢様特有のおっとりとした口調で、友人の美由紀は私の向かいでアールグレイをすすった。

昼前の大学のオープンカフェにはあまり人はいないので、私は就職情報誌を堂々と広げた。ここの学生たちのほとんどは家業やコネで就職するため、こういう雑誌は好奇の的になるのだ。

「別に」

「あら、麗子さん。今日はお弁当ではなかったじゃない」

私が通う大学は、いわゆるお嬢様大学で、通う生徒のほとんどが不景気とはほとんど無縁の上流階級の家柄だ。最近、ようやく共学

になったが、それでも金持ち大学と世間で囁かれてはばからない。

「……毎日作っているわけではないの」

それでも幾人か我が家のように落ちぶれる家もあるわけで。まるで貧乏神でも見るように友人のほとんどが私の前から消えていったが、この美由紀は残った少ない友人の一人だ。

「でも、山坂さんの分も作っているのでしょうか？ 山坂さん、きつと残念がつていらっしやるわ」

美由紀は私が就職情報誌をめくっていた手を思わず止めたのを横目で見ながら、頬に労働を全く知らない指をあてた。

「お弁当を作るぐらいのことはしてさしあげて、いいと思うの。お世話になっているでしょう？ 山坂さんには」

そう。私がこうしてどこかの金持ちのヒヒ爺に売り払われることなく大学生活を謳歌してられるのは、山坂吉之介のおかげだ。

山坂、というのは母方の姓で、本籍は赤城吉之介。親子三代で赤木グループを築き上げた赤城家の三男だ。そして、赤城グループは父から財産をむしりとっていった新興企業の一つでもあった。子飼いのIT会社を通じて、不正取引を繰り返したツケを世間知らずな父に押し付けていたのだ。

それを、私の家に告げにきたのが、山坂吉之介だった。

他の不良債権ともども、自分が責を負う、と。

彼のおかげで、夜逃げは免れた。更に、高円寺の古い本家だけは確保してくれ、私と弟を大学卒業までは面倒をみるとまで約束してくれたのだ。

父は、当然と鼻を鳴らし、母は痴れ者と蔑んだが、私は、未だに納得できないでいる。

高円寺家を助けても何の見返りもない三男坊が、どうして私たちを助けてくれたのか。

「麗子さん、麗子さん」

美由紀の呼びかけに顔をあげると、自分の鞆の中で携帯電話が鳴っていることに気がついた。美由紀に詫びて、電話を取ると、

『麗子さん？』

「き、吉之介！」

先ほどまで頭の中にいた男の声を聞いて、思わず叫ぶ。だって驚くじゃない！

「ど、どうしたのよ」

驚いたことを隠そうとついふてぶてしい口調になるが、相手は気にする様子もない。

『麗子さん、今日の講義はいつ終わりそう？』

「講義？ 五時には終わるけれど」

『そう、良かった。今日は外食でもどうかな。僕のおごりで』

穏やかな彼の言葉を聞きながら、不安になってしまう。

大学の学費から私の生活費まで、加えて私と弟には私費として毎月五万円が渡されている。大学から近いからと私が住んでいた別宅は売り払われてしまったので、他にマンションを探そうという吉之介に、私が同居を申し出た。彼のマンションは偶然にも大学からわずか一駅のところだったから。そして、大学を卒業すれば、私はマンションを出て一人で働くことを約束している。

『毎日、夕飯も作ってくれているからね。たまには』

「それは、私の作る食事が不味いってこと？」

不安でたまらなくなる。

彼に寄りかかりきりで、私がなくなってしまうようで。

『いつも美味しいよ。感謝してるんだ』

「だったら、今日も私が作る！ いいでしょう？」

少しだけ、電話越しに彼の小さな笑い声が聞こえた。

『楽しみにしてるよ』

「人質も大変ね」

携帯を切ると、美由紀が面白がるように笑っていた。

「そっだ。私は人質だ。」

高円寺家が、山坂吉之介に差し出した大事な人質。

だから、彼も私を大切に扱うのだ。

父も言った。彼は三男坊のくせに野心家で、高円寺家の家名を狙って助力してきたのだ、と。

わかってるのに。

私は、夕食の献立を立てるべく就職情報誌を閉じた。

クリスマスのこと 1

「明日、何か予定ある？」

朝食のコーヒーに舌鼓を打っていた僕に彼女はこう切り出した。
年末は目前の十二月も終わり。

暖冬だとニュースは告げるけれど、布団から這い出すには辛い。
少し重たい瞼の先に今日と明日のスケジュールを僕は思い出してみ
る。

会議に会食、帰社してデスクワークでまた会議。明日はデスクワー
クのあとに会議が二つ。

優秀な秘書が管理してくれている綿密な計画は今日も秒刻みだ。
けれど、

「ううん。特にはないよ」

期待と不安と、彼女特有の照れが入り混じった瞳に無粋なことは言
わない。

「何時に帰れそう？」

「そうだなあ……七時には帰れるかな？」

「七時?!」

最近はだいぶ碎けてきたが生粋のお嬢様の彼女が、普段はあまり大
声を出さない。そんな珍しい素っ頓狂な声を上げると彼女は「嘘、
そんなに早いなんて」と視線をさまよわせ、「どうしよう…:そんな
の予定にないわよ!」と独りごちる。

どうやら早く帰ってくるのは駄目らしい。

友達との約束でもあるのだろう。僕に遠慮なんかしてくれなくてもいいのに、彼女は普段まったくと言っていいほど夜遊びもしない。大学生活は存分に楽しんでほしいのに。

もちろん、これからの人生も。

「ごめんね。麗子さん。七時とは言ったけれど、会議が二つもあるからちゃんと約束は出来ないんだ」

そういうと、慌てていた彼女は、ふ、と表情を沈めてしまった。

また僕は目算を誤ってしまったらしい。

僕は黙ってしまった彼女に気の効いた言葉をかけることはできなかつた。

結局、出勤前に辛うじて「いつてきます」とだけ言うことができた。

幾分、滅入った気分で秘書にあうと、彼は、
「クリスマス前なのにこんなに多忙だとは、不景気だと思えませんね」

そうか。クリスマス。

日本人はクリスマスチャンでもないのでにクリスマスという行事をとて楽しむのだった。

彼女には、あまり家族と会える機会もない。

会えるのは盆と正月だけ。

なら、せめて。

「田上くん」

「なんでしょっつ？」

今日と明日はこの皮肉屋で善良な秘書に、
少しだけ苦勞してもらおう
こととしよっつ。

クリスマスのこと 2

私は、クリスマスが大嫌いだった。

派手な装飾もパーティも、以前の我が家に集っていた人々も。参加させられていた頃はいつもなくなってしまうと思っていた。

けれど、いざ本当になくなってしまつと、何だか落ち着かない。なぜかクリスマスを指折り数えてカレンダーを眺めている。

そう、たとえば大きなケーキだとか、プレゼントをもらつて喜ぶ弟の姿だとか。

そついう、もう見られないだろう景色が思い出される。

山坂吉之介という男とマンション暮らしを始めて、半年が経とうとしていた。

いつもヘラヘラしていて、どうしてこんなヤツが社会で働いていけるのかと思うほど頼りない男だけれど、仮にも独身の若い男の家に一人娘を置かせているのは、やはりそついうことで。

けれども、わかつているのかいないのか、吉之介は手にも触れようとしてない。

家政婦のように扱われているといえはその通りだと思う。でも、彼は私をお嬢様として扱う。それは、私が本当に世間知らずなお嬢様ということもあるけれど、大勢のお手伝いがいた頃よりも丁寧に扱われているような気がしてしまうときがある。

気を、使われているのだろうか。

彼は朝が弱くて、私がいつも起こしに行く。冬は布団を剥ぎ取らな

いと彼は起きない。

跳ねている髪を整えることも、食事の支度をするのも、掃除や洗濯をするのも、買い物だって私の日課だ。この家で生活はほとんど私が仕切っているに等しい。感謝されるのならまだしも、と思うのだが、

「明日、何か予定ある？」

朝食の席でこんなことを聞いてしまった。

吉之介という男は、年間行事には疎い。というのも日曜祝日はもちろんゴールデンウィークにも仕事が入る多忙を極めているからだ。本人だけを見ているとそう忙しそうにも見えない若造に見えるというのに一度だけ秘書が持ち込んだ書類の束は、私が今まで持ち帰ったことのある資料よりも多かった。

きつと、クリスマスも仕事で忙しい。

そう期待したのに。

「ううん。特にはないよ」

ワイシャツのとうへんぼくは、にこやかに言った。

何言っているのかしら！

秘書の田上さんが悲鳴あげるわよ！

それに、クリスマス用に何か特別な料理やケーキを用意するとなると今から大変だ。

けれど、私の内心を勘違いしたのか、彼はちゃんと帰れるかはわからないと付け足した。

そうだ。

ちゃんと定時に帰れる保障はない。

いつだって、忙しいときは午前様なのだ。
朝、起こしに行ってもベッドにいないときだつてある。

そして、新年はきつと、この家にはいない。

新年は家族と過ごして良いといわれているけれど、弟とも話して大
学卒業まで家族とは会わないことにしている。

私は、たぶん、人身御供にされたことを許せていないのだ。

押し黙ってしまった私に、彼は「いつてきます」とだけ言い残して、
家を出て行った。

結局その日、彼は帰ってこなかった。

クリスマスのこと 3

「…メリークリスマス」

そうして、今は寒い部屋で一人きり、クリスマスを迎えている。
大学の帰りにコンビニで初めてケーキを買った。

美味しくない。

本当は友達的美由紀のパーティに招待されたけれど、落ちぶれた高
円寺の娘が出て行けるような場所ではない。

全てが遠かった。

駅ビルのイルミネーションも商店街のツリーも大嫌いだ。

どうして、あんなに眩しい。

「う……」

不味いケーキで、一人きりで。
最悪のクリスマス！

「大っ嫌い！」

「うめんなさい」

聞こえてくるはずのない声だ。
だって、

「仕事はどうしたのよ！ 吉之介！」

昨日のスーツのまままで申し訳なさそうに帰ってくるはずがない。

「ごめんね。こんな時間になってしまって」

まだ夕方の六時だ。いつも、早くても七時になるはずなのに。

「今日も仕事だったんでしょう？」

「うん。でも仕事よりも、ケーキとこれを選ぶのに時間がかかって
しまつて」

吉之助がこれ、といくつか荷物を抱えていた腕から私に渡したのは、
赤いリボンにいかにもクリスマス用の包装紙の大きな包みだ。

「何、これ？」

「麗子さんに」

どうぞ、といわれるがまま、開いてみる。
でも。

包装紙から出てきたのは、大きなテディベアだった。
首にマフラーを巻いた、抱き心地の良い可愛いぬいぐるみだと思っ
が、

「……小さな子供ってわけ？ 私は」

低い声で言うと、吉之介は困ったように笑った。

「いや、そういうわけでは……」

「じゃあ、どっという意味なのよ！」

これではまるで、

「クリスマスなんか、楽しみにしている私は確かに子供よ！ でも、

「僕も、楽しみにしていたんだよ」

馬鹿にしている。

きっと、この笑った顔の奥では、私を嘲笑っている。

この人も、私を置き去りにする人たちと同じだ。

「でも、僕の家ではクリスマスといった行事をやらないので、何を
買ったら良いのかもわからなくて」

「え……？」

彼は本当に困った顔で、持っていた荷物をダイニングのテーブルに
置いた。

ケーキに、シャンパンに、どこで買ってきたのか出来合いのパーテ
イ料理に、急いで見繕ったのだらう花束。

「田上くんや会社の同僚に訊いて、買い揃えるのに半日かかってし
まいました」

そう言いながら、彼は大きな袋から取り出したのは街頭の呼び込み
がかぶるようなサンタ帽を取り出した。

「あ！ これをかぶってプレゼントを渡せって言われていたんだよ」

もう一度「ごめん」と彼は謝って、サンタ帽をかぶった。くたびれたスーツに、サンタ帽。それはあまりに間抜けな格好で。

「あはははははは！」

普段なら絶対にしない、大笑いをしてしまった。

ひとしきり笑ったあと、二人で出来合いの料理を食べた。あまり美味しくはなかったけれど、一人っきりのクリスマスよりは、たぶん、楽しいクリスマスになった。

調子に乗ってシャンパンを飲みすぎて、私は人生で初めて酔い潰れてしまった。

朝起きると、ベッドの上だったのだ。彼が運んでくれたのだろう。ダイニングと台所は綺麗に片付いていて。リビングに、新しい家族が増えていた。

「よろしくね」

サンタ帽をかぶったテディベア。

テレビ台の隣に居場所を決めたようだ。

「吉之介！ 早く起きなさいよ！」

私は今日も、朝の弱い彼を起こすべく、カーテンを開けた。

バレンタインのこと

バレンタインは、陰謀なのよ。

彼女はそう切り出した。

「そうなの？」

「そうなのよ！」

売り言葉に買い言葉。

彼女はやや口元を引きつらせながら胸を張った。

今はちょうど、夕食が終わって後片付けもひと段落した曖昧な時間。家事のできない僕でも皿洗いぐらいはできるから、ゆったりとソファに座っていたはずの彼女がいつのまにかダイニングで待っていて少し首を傾げた。

なんだか、彼女はそわそわとしているようだ。

いくら不器用な僕でも食器は一つも割っていないし、今日はまだ彼女の機嫌を損ねるようなことはしていないし、言っていない、はずだ。

心当たりはないが、彼女の気に障ることはなかったと思う。

けれどまだ不安で、彼女をじっくりと見つめた。

亜麻色の長い髪はあまり長さが変わっていない気がするし、薄手のセーターとロングスカートも見覚えがある。

今朝と変わりがあるとすれば、彼女自身が妙にそわそわしていること。

「あの…」

「1」、誤解しないでよね！」

弁解しようとする就先手を打たれた。

生返事もままならない。

「わかった？ バレンタインは陰謀なの！」

「……はい」

こう彼女に念を押されれば頷くほか術はない。

「よし」

彼女は満足したように、後ろ手に隠していたらしいものを取り出した。

「はい」

「はい？」

彼女の白い手に乗っているのは、ほかほかと湯気がたちのぼる

「肉まん、ですか？」

「あげる」

そういえば、彼女は最近コンビニにもよく出入りするようになったという。

突き出された肉まんを受け取ると、彼女はどこか上機嫌にリビングを後にした。恐らくこれからお風呂の時間だ。

残された僕は暖かい肉まんを手を持ったままというわけにはいかなないので、白い中華饅頭を有難くいただくことにした。

とりあえず、無作法だが立ったまま一口。

「…………チョコレート？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8269k/>

お嬢様とわたし

2010年10月12日02時24分発行